

人間と悪魔の学校生活

野良風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪魔たちと楽しく(?)過ごす魔界学園ファンタジー

目次

”使い魔”召喚!	1
8	1

1話

そこには、一人の男がいた

「(此処が今日から通う悪魔学校バビルス)」

「入間くん写真、写真」

「そのキミ写真お願い」

そして此処には、孫バカがいた。

「では、撮りますよ」

「じゃっ新入生はあっちね頑張つて」

「俺も行くか」

—————

「(入間って奴人間の匂いがするな)」

「校歌斉唱」

♪人間丸々我らの食い物魂・血と肉 残らず啜れ♪

「(少し探りを入れてみるか)」

すると袖から小さな虫が10匹ほど現れた

アイツに寄生しろと指を指した方向には人間が俺の仮説が正しければ楽しくなりそうだ

「えー続いて理事長挨拶」

「入間くんおじいちゃんだよ」

「あの時の孫バカ」

その時

「孫と一緒に撮った一枚がこれです」

「俺が撮った奴だ」

「後程配布します」

「凄い悪魔が理事長だと聞いてたがこんな奴とは」

でも、入間を大切にはしてるってことだな

「では続きまして・・・新入生代表挨拶」

確かアイツの家計は火炎系魔術を得意とする悪魔だよな

「新入生代表アスモデウス君・・・に代わりまして特待生入間くん登壇してください」

「これが権力か孫バカもいいところだな」ボソツ

「あべるはうけたるとうだりいうさべりすとうるあぶるせすとうまるあべるげうるま
ほらばつれぎぎ……」

ワアアア

禁忌呪文を唱えるとは、面白い間違えたらそれはそれで面白いだろうな

—————

人気がないところに行き電話をかけた

「もしもし、入学式今終わったよ父さん」

「お疲れ、どうだ楽しめそうか」

「楽しめそうだよ」

「そうか、つてちよつと」

電話の向こうから何やら聞こえてくる

「(電話の向こうで何やってだ)」

「兄ちゃん兄ちゃん」

「元気だな、二人とも」

「コラ、今電話中だぞ後にしなさい悪いな我らの目的を忘れるなよ」

「わかってるって」

その時、虫のしらせが起きた

特待生と首席が戦いを始めたな虫を寄生させて良かった

「悪いけど急用出来たからきるからじゃ」

—————

しかし、戦いは始まってた

「凄い全部避けてる」

「僕なんかほんとムシケラ見たいなもので・・・」

申し訳なさそうに言うのと周りからヤジが飛んでくる

「てめーはムシケラ以下だとよ」「さっさと尻尾まいて逃げろとさ」「良いぞもつと罵

れ」

「ちつ違うんですッ」

「ツツツなんたる侮辱魔術が効かぬなら武術でねじ伏せるのみ八つ裂きにしてくれる」
ジャーマン・スープレックスで倒しやがった

「面白いヤツだ」

—————

アスモデウスとの戦いが終わった後

「入間くん少しお茶に付き合ってくれないかな」

「僕と」

あたふたする入間

「二人で一緒に助けると思っております」

入間ランキング

一位お願い

二位助けて

三位頼む

「ハイ、コーヒーで良い」

「うん大丈夫」

探りを入れてみるか

「俺は、コーヒー好き何だよ特にポ○コーヒーが一番好きなんだよ」

「本当に、そのコーヒー美味しいよね一度だけ飲んだことあるから」

やっぱり人間は、人間

「入間ってやっぱり人間だよね」

「えっ」

顔から冷や汗ですぎだろ

「別に、食べようはしてないから大丈夫何で此処に入るのかが気になってね教えて欲しいなー勿論秘密にするからお願ひ」

「本当に秘密にしてくれるのなら。それは、家の親が僕を売ったから」

「バレたら危ないから見守ってやるよ。面白そうだしねあと新聞面白かったよじゃあねえ」

家に着き

「あつ虫を抜くの忘れてた」

”使い魔”召喚!

ネクロが学校に登校していると前方に入間が見え入間に肩を組んだ

「よ、入間」

肩を組み入間の皮膚に触れた。それは、昨日寄生させた虫を回収する為触れている。

「うわあ、えっと」

「あれ?俺って名乗ってなかった。まあ、改めて俺は、ネクロ・ネリア。ネクロって呼んでくれよ」

「こちらこそ改めてよろしくネクロくん」

入間は、ネクロにあいさつをし終わった時後ろの方から声が聞こえた

「おい、貴様入間様から離れろ」

ネクロと入間は、後ろを振り向くとそこには、昨日入間にやられたアスモデウス・アリスがいた

そして、アスモデウスを見たネクロは

「誰かと思ったらアスモデウスこと、アズちゃんじゃないか。久し振りだな」

「き、貴様は……」

「確か最後に会ったのは…貴族会の時だったけ？」

「何故貴様が此処にいるのだネクロ・ネリア!!」

「え? いたらダメなの? アズちゃん」

アズモデウスは、人間の元に駆け寄りネクロから人間を遠ざけた

「お気をつけて下さい人間さま。コイツは、何を考えているのかがよく分かりません!

下手に近づいたら喰い殺されるかもしれませんよ!」

「え! 喰い殺される」

人間は、喰い殺されるその単語に怖がった

何故なら人間は、悪魔にとって食い物為人間には、余計に怖がった

「おいおい、アズ。まるで俺が怪物みたいな言い方じゃないか。俺が何をしたって言う

んだよ」

「しらばつくれるな貴様と戦った魔獣たちは、骨すら残らないだろ」

「そんな事言うならお前と戦った魔獣は、焼け焦げてるだろがって言うと同じだぞアズ」

しばらくアズモデウスとネクロは、言い争いをしていたのであった

~~~~~

そして三人は、悪魔学校伝統行事である使い魔召喚をするのであった

「此処が使い魔を召喚する為の場所か」

「中々物々しいし。緊張感あるね」

ネクロと入間は、二人してキョロキョロしているのであった

「入間様。此処で使い魔召喚によりクラスも分かれまますし担当官も有名ですからね」

「担当官？」

二人が？を出していると扉がいきなり開いた

扉を開いた者こそが

「肅に監督官の”ナベリウスⅡカエルゴ”である」

「カエルゴ？何処かで聞いた事があつたような？何処だつたけし」

ネクロがカエルゴを何処で聞いたからを悩んでいると

「オイ！次は、キサマの番だ早くこっちに來い」

ネクロが考えていると既にネクロの番となつた

「ハイハイ。今行きますし」

ネクロは、言われるがまま羊皮紙に血で丸を書き魔法陣の中に入りその中央の口ウソクにくべると煙の形が変わってきた

「ほお〜これが俺の使い魔か！」

そこに現れたのは、大きな虫のだった

それを見たカエルゴは、クリップボードに書き出した

「成る程グレート・モス。しかも普通のグレート・モスじゃなく究極完全態グレート・モス）次は、人間貴様だ」

「これからよろしくなあ。グレート・モス」

ネクロは、使い魔に挨拶した後にはアスモデウス、人間の方に向かい

「どうだ、アズ。俺の使い魔カッチョイイだろ。お前の使い魔は、どうなんだ？」

「ほざけ。私のは、キサマのと違い美しいのだ」

「まあ。お前の使い魔なんつてどうでもいいか」

「おい、キサマさつきまでと言ってること違うだろー」

先程まで笑顔だったネクロは、真剣な表情になり人間の方を見た

「人間の方が一番気になる」

召喚とは悪魔が魔獣を使役するまたは、人間が悪魔を使役する儀式だ

そして人間は、にんげんなのである！

「（下手したら近くにいる悪魔を召喚してしまう可能性が高い）おい、アズ」

「何だ今から人間さまが召喚なされるのだぞー！」

「だから、人間の近くにおいて集中を切らしたら悪いから少し離れようぜ」

「確かに！キサマの言い分も一理あるな」

そう言いアスモデウスとネクロは、人間から離れた

「これで少なくとも俺とアスモデウスは、召喚されるリスクが減るはず。そして近くにいるカエルゴ先生が一番危ないな」

そして、入間が召喚の時

ネクロの予想通りに入間の近くにいたカエルゴが召喚途中のため召喚されたのは、上半身のみだった

「(やっぱり！予想通りだ。良かった入間の近くにいらなくて)」

予想をしていたネクロ以外は、この状況についていけずにざわざわし始めた

そして入間は、カエルゴの下半身に近づき引つ張り抜こうとしている

しかし引つ張り抜くのでは、なく押すものである

それを知ってるネクロは、面白い事を思った

「入間、引つ張るじゃなくて。押せ(これでカエルゴ先生は、入間の使い悪魔になる！これは、楽しいことが起きる)」

さらに押せばいい事を知っているカエルゴは、今の発言を聞き逃さなかった

「何を言っているだネクロ・ネリア。押すんじゃないイイ!!」

押された事により召喚が成立したのである

その姿は、もふもふの可愛いらしい姿だった

その後は、大変だった

アスモデウスが入間に近づき

「感服いたしました。カエルゴ卿の態度にお怒りだったのですね！素晴らしい見せしめです!!」

「人間凄いぞ。悪魔が悪魔を呼ぶなんてな」

褒め称えたり、茶化したりしている中たった一人怒りで爆発する寸前のカエルゴは

「ふざけるな貴様ああッ今すぐ契約を解除しろツさもなくば

使い魔が主人を攻撃しようすると処罰が降るのである

そして今カエルゴは、主人である入間に敵意を向けている

ぶえあああああ

そんなこんながあり使い魔契約を解除する事が出来ずカエルゴは、ショックから自宅に寝込むようになった